

Report-k

elect

July 27, 2016

Contents

当時賢者として尊敬を受けていたソフィストたちは、「人間は万物の尺度である」(プロタゴラス)の言葉に代表されるように、人間中心主義の立場をとって、知恵とはそれを持って相手を打ち倒すことができこそ正しく価値があるとし、弁論術に明け暮れていた。また、彼らはその術こそ知恵の価値として、その手腕によって金銭を稼いでいた。その考え方は次第に真実であるかよりも、相手を信じさせることができるか、ということに重きを置きはじめ、すなわちアキレスと亀のような詭弁が流行するようになった。

そんな状況下に活躍したソクラテスは、デルフォイの信託に自分が最も知恵者であるとされたことに疑問を持ち、知恵のあり方について考察した。そして、当時のような知っているふうに見せることができるものを知恵とするのではなく、自分はその根源すら知っておらず、それを一から探求していくべきだとする立場に至った。そして完全な知とは神のみが持ち得るものであるから、その探求に終末はなく、人間の中で最も知恵のあるものというのは、自分が無知であることを自覚し、常に真の知恵を探求する者であるのだとした。これが無知の知である。

そして一から真の知恵を求めるにおいて、魂に備わるべき徳(アレテー)を知ることを提示した。彼は、魂というものは人間を人間たらしめる人格的な中心であるとし、そこには人間が倫理的に、つまり善く生きるための行動原理があるのだとした。このようなその魂に備わる優れた性質をソクラテスは徳と呼び、それに基づいた行動を善美のことがら、カロカガディアとし、人間にとって最も大切なことだとした。また、徳には知恵や節制、敬虔、正義などが定義され、それらを身につけるべく探求することが、無知の知から始める真実の知恵の探求において最も優先されるべきことだとした。なぜなら、ソクラテスは人間の誤った行いは徳についての無知が原因であって、それを克服すれば、人間は自ずから善い生き方ができるはずだと考えているからだ。ところが、それは元から魂に備わっているものではなく、魂に徳がつくように配慮していかなければならないとした。これこそ魂への配慮であり、ソク

ラテスの周囲の人々に欠けているものだとした。

彼はソフィストや、知恵が弁論術に基づくなどと信じている者達に、彼等の求める知恵は目先の相手を言いくるめるだけの知恵に過ぎず、人間の根源にある徳の知恵を欠いているとして批判した。そして地位や金銭について憂慮することは墮落であり、無知の知を認め、自らの源たる魂に備わるべき徳を探究し、それを身に、魂につけるよう努力する、つまり魂への配慮をすることで人間として善いことを行えるようになるべきだとした。